
介護福祉の精神に関する、個人的な所感

はなだりょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

介護福祉の精神に関する、個人的な所感

【Nコード】

N3641S

【作者名】

はなだりよう

【あらすじ】

まあ、人生いろいろだ。

ちよつとごめん愚痴になる。

愚痴とか嫌な人はスルー推奨なのだ。

最近介護の仕事始めたんだ。

「5年以上前に資格とつたはいいけど、介護の仕事をした事はない、正直資格取る際に覚えた事もほとんど覚えてない。でも精一杯頑張るつもりでいる」って言つて、所長はその意思を買つて雇つてくれた。

所長も、昨日の指導係の人も、大事な場面ではすごく厳しい怒り方をするけど、それは必要な事だつて分かるんだ。

今日ちよつとした手違いがあつて、利用者さんが冷たい水をかぶつて超怒る場面があつた。

俺はそれを所長に報告してなくて、それを怒られた。

「なんで報告しなかったの？どんな些細な事でも、問題が生じたらすぐ私に報告しなさいって言つてあつたはずでしょ。ミスは誰にもある。ミスをしようとしてミスをする人なんていない。みんな精一杯やつてるのは分かつてる。それでも間違ひは起こるものよ。まだ研修4日目のあなたに、ミスの無い仕事を求めるつもりもない。でも、ミスをした時、それを報告する事は、研修4日目のあなたに

だってできたはずよ。利用者さんたちはみんな障害を抱えたお年寄り達だから、ほんの些細なミスが本当に命取りになるの。今後は絶対、どんな事でも私に報告しなさい」

ってさ。

厳しい顔と口調だったけど、ものすごく正しい指導だと思ったから、全然嫌とは感じなかった。

ああ、ほんと、次から気をつけなきゃな、報告を怠らないようにしなきゃなって思った。

「指導される事」は俺はあんまり嫌いじゃないんだ。結構厳しくてもさ。

それはそれとして、今日の指導係の人は、何かにつけてこう言うんだ。

「君はほんと何やらせても鈍臭いっていうか、4日目なのになんでこんな事も出来ないわけ？もっとチャキチャキ、言われないでも率先して自分から動きなよ」ってさ。

俺なりに精一杯やってるつもりなんだけど、まだ手順が掴めてなかったり、力加減が分からない事が多くて、少しでももたつくと彼はすぐさまそっという感じのアレを言うんだ。

ずっと後ろについて3分に1回そっというアレを言われると、もう焦

つちゃって、気が動転して、頭真っ白になっちゃって、昨日は出来た事も上手く出来なくなつて、そうするとまた彼がネチネチ後ろで言うもんだから、余計焦つて、頭混乱して、覚えなきゃいけない事が頭に入つてこなくなる。

彼が口を開けば開くほど、俺が「一人前に仕事をこなせる日」が遠ざかつていく。

俺はさ、幼稚園児の頃から何をやらせてもみんなよりワントempo遅れてるようなアレだったんだ。

いつだって俺なりには一生懸命取り組んでるつもりなんだけど、親や先生には「あんたはいつもワントempoみんなから遅れてる、ほんと鈍臭い。動きがなんかぎこちなくて、覇気が無く見える」って言われてた。

自分では自覚があんまりないんだ。

一生懸命意識集中してやってるつもりなんだ。

だけど、傍から見るとなんかぎこちなかったり、ワントempo遅れてるらしい。

心臓から出てる血管が迂回する形で生えてて、折れまがったホースみたいに血流を圧迫してて、それによる不整脈があったりして、血の流れがワントempo遅れたり、その分一気にドドドっときたりする。

そういうアレが原因なのか、はたまた全く違う原因があるのかは分からないけど、とにかく昔からほんと俺は鈍臭いんだ。

頑張っても、鈍臭い。

鈍臭いけど、自分なりにがんばってる。

俺が俺なりに頑張ってる事を、頑張っても鈍臭い自分にどれだけ不甲斐無さを感じてるかって事を、誰も分かっていてくれなかった。頑張っても頑張っても人からは鈍臭いって言われるばかりで、自信を失って、引込み思案になって、臆病になって、新しい事に挑戦出来なくなってる、そういうアレを誰も分かっていてくれなかった。動きが緩慢で、手足が震えてる老人と、ある部分では一緒なんだ。

自分の意思の通りに、身体をうまく扱えない。

うまく動けないからって、やる気が無いわけじゃないんだ。自分なりに精いっぱいやってる。

けど彼はこつこついうんだ。

「君、ほんと鈍臭いなあ。やる気あんの？なんでそんな鈍臭いわけ？一体なんなの？」

つてぞ。

俺が散漫な意識でやってたり、本当にやっちゃいけないミスをやら

かしたなら、叱られて当然と思う。

でも、精一杯やってる事まで全部否定されると、もうこれ、俺みたいな鈍臭い人間がやっていい仕事じゃないのかなって思っちゃう。

それでも、俺みたいな「普通の人みたいに満足に体を運用出来ない葛藤を知ってる人間」だからこそ、身体に障害がある人の気持ちを本当に自分の事のように察する事が出来るし、それでも無理をすればそれなりには動けるから、そういう人間が「健全な介護者」と「要介助者」の間の橋渡しをする事に意義を感じて、この仕事をしたと思うたんだ。

たとえ技能的なアレで言えば向いて無くても。

俺みたいな何やらせても鈍臭い奴に、肉体面で向いてる仕事なんてないんだから。

せめて、精神の部分で貢献できる仕事をしたと思った。

身体の不自由なお年寄りの命を預かる仕事なんだから、ミスがあっちゃいけないし、本当に厳しい業界だっていうのは分かっている。

だから俺だって不器用なりに、利用者さんが怪我をするようなミスだけはないように、そこだけは常に全力で気を配ってやってる。

けどまだ力加減とかが分からなくて、下手に急いでやるとまたへマをやらかして利用者さんに怪我させちゃったりしちゃうかもしれないから、力加減を計りながらやってたりして、熟練の人達より作業が遅かったりする。

その横でイチイチ「ほんと君とろいなあ。何やってんの。なんでこうチャツチャ力できないわけ？」とかずっと言ってるんだ。

「お客様の前で見せていい表情」とはとても言えないしかめっ面を、利用者さんの前でもガンガン浮かべながらさ。

「厳しい教育」は俺は嫌いじゃないんだ。

ただ、こういうのはほんと分からなくなる。

あなた何がしたいの？って言いたくなる。

イライラするのは分かるけど、利用者さんの前でそういう表情見せちゃだめでしょっていいなくなる。

俺に早く育って欲しいの？それとも、俺の事が気に食わないから潰したいの？って。

なんかこう、彼の瞳の奥に愛を感じないんだ。

身体が不自由で、動きの緩慢な利用者さんに対してだけ寛容なのは、彼らの障害を理解してるからじゃなくて「お客さんだから、障害者だから、哀れむべきものだから」彼らの緩慢さを「許してあげてる」だけなんじゃないかって、そう思えて仕方ないんだ。

利用者さんに対して、彼が言葉を投げかけて、利用者さんが言葉を返す。

けれど彼はいつも「利用者さんの言葉に対する応答」っていうより、彼の個人的な所感を色々並べてるだけなんだ。

聞いてて対話に感じないんだ。

利用者さんの言葉に、真摯に耳を傾けてる感じがしないんだ。真摯に耳を傾けてるなら、なんでそんな突拍子もない言葉で返すのって思っちゃうような、そういう言葉ばかり言うんだ。

なんだか、彼と利用者さんの会話を聞いてると、すごくチグハグで変な感じがする。

利用者さんがボケてるからじゃなくて、「利用者さんをボケた老人として話してる彼」が、そのチグハグの中心にいるように、見えちゃうんだ。

それでも、業務上聞きたい事に限っては、彼もちゃんと聞いているけど。

理解や福祉とは対極の、押しつけがましいエゴで介護をしてるよう
に感じちゃうんだ。

仕事そのものは俺なんかより何百倍も出来るし、利用者さんが怪我
しないように最大限留意して仕事してるのも分かる。

自分自身の仕事に関しては。

厳しい先輩は他にもいるけど、彼だけは少しソレと違う、陰険さを
感じるんだ。

彼の呟きを聞いてると、こっちまで気持ちが悪くなる。利用者
さんの前でうまく笑う事も出来なくなる。

利用者さんに気持ち良く帰ってもらう事が前提の仕事なのに。

彼が目の前にいるだけで、俺まで表情がこわばって引きつってしま
う。

なによりアレなのは、そんな強張ってる俺以上に、なにかこう、取り憑かれたような、引きつったような、筋肉が硬直したような表情を彼はいつも浮かべてるんだ。
見えない何かに常に追い立てられてるような、そんな表情。

自分の目の前にいる相手にも「追い立てられる気持ち」を植え付けたいと思ってるような、そんな表情。

彼もまだ介護歴は長くなって、正しく指導出来るような余裕が無いんだと思う。

だからそういう指導力的なアレを責めたいわけじゃないんだ。

ただ、なにかこう、そういうアレと違う、人間的な陰湿さを感じちゃうんだ。

そういう陰険さだけは、どうしても苦手なんだ。

ああいう陰険さじゃない「教育」ならどんなに厳しくしてもらっても、俺は「次からは気をつけます。頑張ります」って思えるんだだけだ。

あれは、本当にやる気を削がれる。

でも、そういうアレを理由に辞めるのもアレだから、今後も彼の態度が変わらないようなら、おもくそ正面から言ってみようと思う。

「あなた、機能障害を患った人の気持ち、本当に、真剣に考えて仕事してるんですか？あなたが人の機能的な至らなさに配慮するのは、お金出してくれるお客さんに対してだけなんですか？あなたにとつて福祉って一体なんですか？」って。

こういうの、ほんとおれ我慢できないんだ。
不満抱えたまま辞めるとかも出来ない。

直接本人に言わないと納得いかない。

俺みたいな、入浴介助もトイレ介助も手際よく出来ない新米が言っているアレじゃないってのは良く分かってるんだけどさ。

ちよつと彼はそういうスキルのなアレと違う次元で何か大事なものを見落としてる気がするんだ。

彼のこと、まだ全然分からないけど、きっとあんなふうになっちゃったのにも、何か因果というか、原因となる経緯があっただんじやないかと思う。

出来る事なら、それを引きずり出して、解きほぐしたい。

別に彼っていう人間が嫌いなわけじゃないんだ。

ああいう風な陰険さを宿す人の気持ち、なんとなく、分からなくもない感じがしちゃうんだ。
分かるとも言えないけど。

彼が間違いをしてるようには感じるけど、対話をしたい。
きちんと俺の考えを聞いてもらって、彼の考えを聞きたい。
歩み寄りをしたい。

人間的な部分で。

それはきつと仕事の出来不出来とは関係ない、ただ単純な、向き合う心があればできる事だ。

彼の為にも、彼と今後関わる利用者さんや、同僚や、彼に今後指導を受ける事になる人達の為にも、一発突き付けてみようと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3641s/>

介護福祉の精神に関する、個人的な所感

2011年9月16日02時20分発行